毎日jp

広島

シンポジウム：上関原発予定地、「影響調査を」強調－－３学会、中区で　／広島

◇５０年前の生態系残る豊かな海「貴重な生物多様性」

中国電力の上関原発建設予定地（山口県上関町）周辺の慎重な環境評価を国や中電に求めてきた日本生態学会、日本鳥学会、日本ベントス学会によるシンポジウムが１０日、中区の広島国際会議場であった。学者らは集まった約５００人に対し、建設地の生物の多様性の貴重さと、原発建設による影響調査の必要性を強く訴えた。【矢追健介】

◇温排水

学者らの一番の懸念は原発から出る温排水。原発周辺海域の温度が上がり、希少生物や魚類の生息環境が変わってしまう恐れが強いという。また、京都大大学院の加藤真教授（生態学）は、冷却水として海水を取り入れる際に投入される殺生物剤、次亜塩素酸ソーダの危険性を指摘し、ブラジルやインドの原発の温排水口でプランクトンや魚が少なくなった事例を説明した。「殺生物剤はカキの幼生に対し強い致死効果を持つ。影響が広島湾にも及ぶ可能性がある」と強調した。

◇天然記念物にも影響が

建設地周辺では、地球上に５０００羽ほどしかいない天然記念物の鳥、カンムリウミスズメも生息している。詳しい生態が明らかでなかったが、上関地域周辺での生息を初めて発見した九州大大学院の飯田知彦研究員は「上関の海は、５０年前の瀬戸内海の生態系がほぼそのまま残るロストワールドだ」と、上関の海の豊かさを強調。そのうえで、魚の卵や稚魚、イカの子どもといった浮遊生物が冷却水として原発に取り込まれて加熱されることで多くが死ぬことが予想されることから、食物連鎖への影響を懸念した。飯田研究員は「自然でも卵や稚魚は生存率が低く、９９％が死ぬ。残されたわずかなものが死んでしまうと連鎖が壊れ、カンムリウミスズメも生息域を失ってしまう」と話した。

３学会はこれまで、国や中電に慎重な環境評価を訴え続けてきた。約１０年前から中電による環境影響調査の不備を訴え、温排水が生態系に与える影響の正確な調査を求め、国や中電に要望書を送るなどしている。中電の調査には上関地域でカンムリウミスズメが生息しているという記述がなく、日本鳥学会は新たな調査が必要だとしている。

◇小生物の命は人につながる

加藤教授は「内海では環境への影響が蓄積していく。瀬戸内海の残された自然を守るため、あの地は原発建設に最もふさわしくない」と訴えた。シンポジウム世話人の佐藤正典鹿児島大教授は「人間への影響を未然に防ぐには、小さな生き物の命を守らねば。原発は事故時のみならず、通常運転でも環境への影響は大きい」と説明。「生物はその一種だけで生きるわけではない。すべてを残さないと意味がない」と強調した。

シンポジウムに参加した広島市大４年の脇山都さん（２３）＝南区＝は、卒論として上関原発にまつわる歴史をまとめている。「環境は、大きな循環の中で成り立っているという考え方を大事にしたい」と話した。

毎日新聞　2010年1月13日　地方版